九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「この世に恨みのこることもはべらず」：「若菜」以後の朱雀院（一）

辛島，正雄

https://doi.org/10.15017/2559300

出版情報：文學研究. 93, pp.1-26, 1996-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

「この世に恨みのこることもはべらず」

――「若菜」以後の朱雀院（一）――

辛島正雄

はじめに

朱雀院の帝、ありし御幸の後、そのころほひより、例ならず悩みわたらせたまふ。（一一頁。『源氏物語』の本文の引用は「日本古典文学全集」本により、所出ページを示したが、表記等に若干手を加えた）

いわゆる『源氏物語』第二部の始発を告げる「若菜上」巻頭では、それ以前の物語世界において、常に光源氏の引き立て役に甘んじてきた異母兄朱雀院に、にわかにスポットライトが当てられる。とはいえ、そこでの院は、宿病の悪化により、一日も早い出家を望むという切迫した状況にあり、物語の表舞台からの退場も間近と予想されるため、いくら院がここでクローズアップされようと、今後、院自身が物語の枢要な位置を占めるなど、およそ予想しがたいことであろう。

はたして、物語では、ただちに、女三の宮というまったく新しいヒロインの存在が知らされ、以後しばらく、父である朱雀院が、出家にあたってその後事を託すに足る人物として、光源氏に白羽の矢を立て、源氏もそれを了承するに至る経緯が語られる。そして、女三の宮が、六条院の女主人として迎えられることで、いわゆる第二部の物語は、

本格化するものと考えられる。とすれば、朱雀院の存在は、女三の宮を光源氏に嫁がせることで、物語展開上の重責を果たしたと見てよいことになろう。朱雀院は、女三の宮を物語世界に導入する大役を担わされたがゆえに、異例の存在感を発揮したというわけである。

しかしながら、いかにも物語の再始動と呼ぶにふさわしいこの巻の始発部の展開は、それを注意深く辿ってゆくとき、朱雀院を中心にしてあらためて再確認されてくる世界が、新たなドラマの導入部というのみならず、それ自体、異様な緊迫感を孕んだ、危うい人間関係が再確認されるようなものであり、さらには、その破綻への予感に満ちたものであることが読み取れるように思われる。すなわち、ここは、第二部の導入部、あるいは第一部と第二部との連接・部といった見かたではとうてい収まりきらない、物語の主題性にもっと積極的に関与する重さを備えているように思われるのである。

つとに、「紆余曲折の果てに女三宮の六条院降嫁が決定するのだが、これが爾後の物語世界の要となる部分だけに、その経過をめぐって論義は集中し」（伊藤博「朱雀院」〔「国文学」13巻6号、一九六八年五月〕八九頁）ている、と評されたごとく、幾多の高名な論文が備わり、すでに徹底的に読み解かれた感のある「若菜上」巻の冒頭部ではあるが、筆者には、なおそこに根本的な誤解が手つかずで残されているように思われてならない。その最たるものが、朱雀院という人物に対しての理解（無理解？）ではないかと思われる。以下、今さらの感もあるが、逐一本文について、再検討を試みる。

一　弘徽殿大后の死

巻頭、朱雀院の病悩とあわせて、その母、弘徽殿大后がすでに他界していることが、唐突に知らされる。このことの意義につき、たとえば「全集」本の頭注では、「弘徽殿大后の薨去は、朱雀院にとっては桎梏が取り除かれたこと

であり、以後は院自身の判断が物語の展開の要因となる」（一一頁）と簡明に記す。

ところで、朱雀院にとって、「桎梏が取り除かれた」とはどういうことか。生涯光源氏への敵意を燃やし続け、息子朱雀院に対しても強圧的に君臨し続けた母は、もういない。となれば、いまやその呪縛から解放された朱雀院は、遅まきながら、かねて願ったような、光源氏との兄弟の親密さを回復することも、不可能ではあるまい。ともかくも、ここにおいて、朱雀院は、はじめて光源氏と一対一で向き合う存在となりえた。そんな院に、にわかにスポットライトが当てられた、ということなのだ。

となれば、これから縷々描かれることになる朱雀院の言動は、それ以前の物語世界の厚みや重みを引き受けながら〔「若菜」両巻は、清水好子氏によって、「過去に深く浸透された今を書くという方法」が析出されていること、周知のとおりである〔「若菜上・下巻の主題と方法」〈同氏著『源氏物語の文体と方法』（一九八〇年、東京大学出版会）所収〉一九二頁〕〕、院自身はここではじめて自分を自分で表現しうる状況にあるということにおいて、まさしく画期的であり、そこに、およそ従前とは趣を異にした院の姿がたち現れたとしても、すこしも不思議はあるまい。すでに、三谷邦明氏にも、

退位後も、堪えがたい重庄（ママ）として、弘徽殿の大后は、朱雀院の実存を規定していたと言うべきだろう。そうした大后の桎梏から解放され、朱雀院が自己の判断で自己を語るのが「年ごろ」以下の言葉で、その朱雀院の判断の中で弘徽殿の大后の死がはじめて語られていることは、極めて象徴的であると言えよう。（「若菜巻の方法――〈対話〉あるいは自己意識の文学――」〔同氏著『物語文学の方法Ⅱ』〈一九八九年、有精堂〉所収〕三二二頁）

との発言もあった。もちろん、実際にいかなる朱雀院像がたち現れるか、予断は許されないが、開巻早々このように意味深長な設定がなされていることの重さを、十分に受け止めておきたいのである。

二　「この世に恨みのこることもはべらず」

「西山なる御寺造りはて」（一二頁）た朱雀院にとって、出家の障りは、故藤壺女御腹の女三の宮の処遇だけとなった。自分が出家してしまったあと、「誰を頼む蔭にてものしたまはんとすらむ」（一二頁）と気が気でなく、財産分与でも特別待遇である。

御子の春宮が、母女御を伴って面会に来た折も、ことさら女三の宮のことを頼みこむ。朱雀院は、次のように言う。

「（A）この世に恨みのこることもはべらず。（B）女宮たちのあまた残りとどまる行く先を思ひやるなん、さらぬ別れにもほだしなりぬべかりける。（C）さきざき人の上に見聞きしにも、女は心より外に、あはあはしく、人におとしめらるる宿世あるなん、いとくちをしく悲しき。（D）いづれをも、思ふやうならん御世には、さまざまにつけて、御心とどめておぼし尋ねよ。（E）その中に、後見などあるは、さる方にも思ひ譲りはべり。三の宮なむ、いはけなき齢にて、ただ一人を頼もしきものとならひて、うち棄ててむ後の世に漂ひさすらへむこと、いといとうしろめたく悲しくはべる」（一四頁）

来訪した跡継ぎの春宮は、「御年のほどよりは、いとよくおとなびさせたまひて、御後見どもも、こなたかなた軽々しからぬ仲らひにものしたまへば」（一三頁）、父としても一安心、ということで、おのずとAのような切り出しかたになるのであろう。しかし、不安の種がないわけでは、もちろんなかった。四人の女宮たちの将来（B）が、女の宿世の困難さ（C）を思うと、どうにも気がかりなのだ。出家後の自分は何もしてやれない。即位した暁には、ぜひとも春宮の慈愛に期待をかけたい（D）。中でも、母のない女三の宮が、自分の出家後、「漂ひさすらへむこと」が予想され、何より悲しい（E）。

なんのことはない。「この世に恨みのこることもはべらず」どころではなかった。未練と不安とに後ろ髪をひかれ

ながらも、病勢が出家の遅延を許さないのだ。

それにしても、朱雀院が「この世に」抱く「恨み」とは、ここにいう子を思う親心といった説明で、覆いきれる底のものなのであろうか。いわゆる第一部での朱雀院は、「姿は美しく性格も温雅だが、反面柔弱にすぎ、決断力と卓抜な学才に欠けるむしろ暗に凡庸に近い貴人として扱われている」（今井源衛「女三宮の降嫁」〔同氏著『源氏物語の研究究』〈一九六二年、未来社〉所収〕一四二頁）と評されるような人物であり、また、「若菜」以降の諸巻でも、院の女三の宮を思う情の深さがはなはだ印象的であることは、否定すべくもない。しかし、だからといって、子煩悩な院の姿に、「院であるというより、世間なみの一人の親であるにすぎない」（西郷信綱著『源氏物語を読むために』〔一九八三年、平凡社〕第七章「古代的世界の終焉」一六八頁）として、そこに真実味を看取してすむような問題にも思えないのだ。朱雀雀院が、このような、逆説にしか聞こえないようなことばを発する人物だということの意味を、再点検してみる必要があろう。

三　「年ごろ事にふれて、その恨みのこしたまへる気色をなん漏らしたまはぬ」

その後、朱雀院は、「朝夕にこの（女三ノ宮ノ）御ことをおぼし嘆」（一五頁）きつつ、病状は、死を覚悟させるまでに悪化する。そこに、次の一文が現れる。

御位を去らせたまひつれど、なほ、その世に頼みそめたてまつりたまへる人々は、今も、なつかしくめでたき御ありさまを、心やり所に参り仕うまつりたまふ限りは、心を尽くして惜しみきこえたまふ。（一五頁）

光源氏が須磨・明石に退去せざるをえなくなった、あの政治的緊張関係の余波は、ここに確かに残っていた。冷泉帝の御代を迎え、光源氏が権勢の頂点を極め、栄光をほしいままにした後も、人々がすべて、それに靡き従っていたわけではなかったのだ。反光源氏のシンボル的存在が、じつは朱雀院であり続けていたのである。

光源氏も、そうした事情を熟知した上で、懇ろな見舞いを欠かさない。死期の近い朱雀院との融和に努め、自ら参上したいとも伝える。が、上皇と准太上天皇との対面という厳めしい舞台設定が整う前に、まず夕霧との対面が語られる。

重病で、「御簾の外にも出でさせたまは」（一五頁）ぬ朱雀院は、夕霧をわざわざ「御簾の内に召し入れて」、「こまやか」に話を始める。

「故院の上の、いまはのきざみに、あまたの御遺言ありし中に、この院の御こと、今の内裏の御ことなん、とり分きてのたまひおきしを、おほやけとなりて、事限りありければ、内々の心寄せは変はらずながら、はかなき事のあやまりに、心おかれたてまつることもありけんと思ふを、年ごろ事にふれて、その恨みのこしたまへる気色をなん漏らしたまはぬ。さかしき人といへど、身の上になりぬれば、こと違ひて心動き、必ずその報い見え、ゆがめることなん、いにしへだに多かりける。いかならんをりにか、その御心ばへほころぶべからむと、世人もおもむけ疑ひけるを、つひに忍び過ぐしたまひて、春宮などにも心を寄せきこえたまふ。……」（一五～一六頁）

光源氏との対面を望む朱雀院が、過去の自分の非を詫びるとともに、これまでの源氏の厚意に謝するのは、社交辞令としても当然であろうが、これが素直に本心を披瀝したものでないことも、もちろんである。おそらく院は院で、腹のなかには別の思いがあるに違いなく（「藤末葉」巻は、栄華を極める六条院のただ中に招かれた朱雀院が、「秋をへて時雨ふりぬる里人もかかる紅葉のをりをこそ見ね」と詠み、「恨めしげに……おぼしたる」院に対して、冷泉帝が、「世の常の紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を」と取りなす場面〔四五三頁〕で終わった。こうした朱雀院の鬱屈した思いが、続く「若菜上」巻に入るや霧消してしまったとは、とうてい思えない）、その落差を思うとき、筆者としてはいささか胸の悪くなるのを禁じえない。そもそも、源氏のことを、「年ごろ事にふれて、その恨みのこしたまへる気色をなん漏らしたまはぬ」、過去の聖賢にもまさる人格者だと、どこをどう見て言えるのか。そんな卑屈な態度をとり

ながら、朱雀院は、源氏といかなる対面をしようというのか。

これを、「第一部の須磨流謫事件は回想され、ここに見事な終止符が打たれている」（前掲清水論文一六九～一七〇頁）とする意見もあるが、むしろ、読者が忘れかけていた過去を、わざわざ蒸し返しているようにさえ映るではないか。

それにしても、ここでの「恨みのこし」云々の、これまたなんと皮肉なひびきをたたえていることか。ことばの表面の意味と内実とが大きく乖離してゆくとき、見せかけの平穏は、危うい均衡の上にかろうじて保たれているにすぎないであろう。朱雀院は、そのような危ういことばを、発し続ける。かれは今の平穏の継続を願っているのか。その当否は、慎重に見定められねばなるまい。

夕霧のそつのない受け答えに、朱雀院は、かれを懸案の女三の宮の婿にどうかと思う。夕霧の退出後、かれを褒めそやす若女房に、老女房が、若いころの光源氏とは比べものにならないというと、朱雀院もそれに同意し、源氏讃美をひとくさり語る。たしかに、朱雀院は、異母弟源氏を愛し、魅了されてはいるらしい。

四　「片生ひならむことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえばや」

朱雀院は、女三の宮を見ながら、「見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならむことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえばや」（二〇～二一頁）と言う。そして、乳母たちの前でも、「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生ほしたてけんやうに、この宮を預かりてはぐくまん人もがな」（二一頁）と繰り返す。

父は、娘が「片生ひ」であることを、よく承知している。前に引いた春宮へのことば（E）に、妹をそっちのけで、「三の宮なむ、いはけなき齢にて」とことさら強調していたのも、そうした思いがあるからである。そのような娘の結婚は、だから、相手が「片生ひならむことをば見隠し教へきこえ」、「生ほしたて」てくれるものでなくてはなら

ない。あの、光源氏が、式部卿宮の娘を育て上げたように――。だが、高貴な内親王の相手となると、「ただ人」（二一頁）では具合が悪い。入内も、メリットが期待できない。朱雀院は、今さらながら、前途有望な夕霧を手遅れにしたことを残念がる。

ここで、乳母の一人が提言する。

「中納言は、もとよりいとまめ人にて、年ごろもかのわたりに心をかけて、外ざまに思ひ移ろふべくもはべらざりけるに、その思ひかなひては、いとどゆるぐ方はべらじ。かの院こそ、なかなか、なほいかなるにつけても、人をゆかしくおぼしたる心は絶えずものせさせたまふなれ。その中にも、やむごとなき御願ひ深くて、前の斎院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ」（二一～二二頁）

夕霧は、婿候補から除外される。代わって浮上するのが、その父、光源氏である。それを聞いた朱雀院の反応が、はなはだ微妙で、興味をそそる。

「いで、その古りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ」とはのたまはすれど、「げに、あまたの中にかかづらひて、めざましかるべき思ひはありとも、なほ、やがて親ざまに定めたるにて、さもや譲りおききこえまし」などもおぼしめすべし、……（二二頁）

とっさに、拒絶反応をおこした朱雀院であるが、すぐに冷静になり、「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生ほしたてけんやうに、この宮を預かりてはぐくまん人もがな」との自らのことばを思い起こしたか、「親ざまに定め」て、「譲りお」こうかとも考えるらしい。

朱雀院は、さまざまなかたちで光源氏に言及するが、反射的に口をついて出たこのことばにこそ、院の光源氏観が、端的に現れているとせねばなるまい。かれは、源氏を信頼しきっていない。「その古りせぬあだけ」を、苦々しく思い返す。それでも、かれ以外には考えられまい、とも思っている様子である。それにしても、信頼できない男に愛娘

を託そうとするとは、どういうことか。

朱雀院のことばが続く。

「（α）まことに、すこしも世づきてあらせむと思はん女子持たらば、同じくはかの人のあたりにこそは、触ればはせまほしけれ。（β）いくばくならぬこの世の間は、さばかり心ゆくありさまにてこそ、過ぐさまほしけれ。（γ）我、女ならば、同じはらからなりとも、必ず睦び寄りなまし。若かりし時など、さなんおぼえし。（δ）まして、女のあざむかれんはいとことわりぞや」とのたまはせて、御心の中に、尚侍の君の御事もおぼし出でらるべし。（二二頁）

異様に昂った調子の物言いに注意したい。まるで、自らを無理やり納得させるためだけに発せられたかのごとき、奇怪なことばの数々――。「これは、これまでにもかたられている光源氏頌と同次元のやはり最大限の頌詞であり、朱雀院としてははなはだ自然な感慨なのだ」（秋山虔「「若菜」巻の始発をめぐって」〔同氏著『源氏物語の世界――その方法と達成――』（一九六四年、東京大学出版会）所収〕一六一頁）などと評されたこともあるが、いかがであろうか。「全集」本の頭注が、「以下の朱雀院の言葉は、……なおやや異常」（二二頁）とする感覚を、支持したい。

朱雀院は、「すこしも世づきてあらせむと思はん女子持たらば」、ぜひ光源氏の配偶にしたいものだ、と言う（α）。だが、当の女三の宮は、「片生ひ」であることを庇ってもらう必要のある、「世づきてあらせ」ることのきわめて困難な娘なのだ。父院としては、それを熟知している以上、「世づきてあらせむ」などとは考えず、むしろ、「世づかぬ」娘としての人生を心配してやってこそ、責任ある親の態度というべきではあるまいか。

βのような感慨も、死を覚悟する朱雀院にとっては実感であっても、「御年十三四ばかり」（一二頁）の女三の宮の将来を心配する者のことばとしては、いかにも無責任であろう。「さばかり心ゆくありさま」とて、「いくばくなら」ず移ろいゆく定めであるし、そのとき、「いくばくならぬ」人生だからと教えられていても、「いくばくならぬ」どこ

ろではない長さであることを痛感させられるのは、ほかならぬ女三の宮ではないか。

γに至っては、不謹慎も極まる。娘のことなどそっちのけで、朱雀院の源氏に対する、羨望とも嫉妬ともつかぬ、また愛しているのか恨んでいるのか分からぬ、独りよがりの感懐が披瀝されるばかりである。「我、女ならば」の「女」とは、「世づきたる」女の謂であって、女三の宮はそもそもその範疇にないことを忘れている。

δのようにことばを継いで、朧月夜へと思いをいたすとき、子を思う親の顔つきはすっかり薄れ、源氏の「あだけ」への、朱雀院の怨念めいた感情のゆらぎが、ほの見えてくるようである。「六条の院が望むとき、女は一人として拒否しない。それも無理がない、と言うとき朱雀院は、朧月夜を思い、そして許しているのである」（玉上琢彌著『源氏物語評釈　第七巻』〔一九六六年、角川書店〕四六頁）との意見もあるが、従いがたい。

朱雀院は、ほんとうに女三の宮のことを心配しているのか？　――根本的な懐疑が生じても、しかたのないところではあるまいか。かれが娘を愛していることは確かだとしても、ひとたび源氏のこととなると、娘そっちのけで、過剰なまでに源氏を意識せざるをえない朱雀院――。明らかに、かれは、源氏に特別な感情を抱いているのだ。

五　「さるべき人の心にゆるしおきたるままにて世の中を過ぐす」

女三の宮の上席の乳母の兄である左中弁が、六条院にも長年仕えている関係で、婿選びは、おのずと光源氏が本命視されることとなる。

弁との話し合いをうけて、乳母が、保留条件つきながら、光源氏は女三の宮との結婚を承諾するであろうと啓上すると、朱雀院は次のように応ずる。

「しか思ひたどるによりなん。皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなる事も、めざましき思ひもおのづからうちまじるわざな

めれと、かつは心苦しく思ひ乱るるを、またさるべき人に立ち後れて、頼む蔭どもに別れぬる後、心を立てて世の中に過ぐさむことも、昔は人の心たひらかにて、世にゆるさるまじきほどの事をば、思ひ及ばぬものとならひたりけん、今の世には、すきずきしく乱りがはしき事も、類にふれて聞こゆめりかし。昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日はなほなほしく下れる際のすき者どもに名を立ち、あざむかれて、亡き親の面を伏せ、影を辱むるたぐひ多く聞こゆる、言ひもてゆけば、みな同じことなり。ほどほどにつけて、宿世などいふなることは知りがたきわざなれば、よろづにうしろめたくなん。すべてあしくもよくも、さるべき人の心にゆるしおきたるままにて世の中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世に衰へある時も、みづからの過ちにはならず。あり経てこよなき幸ひあり、めやすきことになるをりは、かくてもあしからざりけりと見ゆれど、なほたちまちふとうち聞きつけたるほどは、親に知られず、さるべき人もゆるさぬに、心づからの忍びわざし出でたるなん、女の身にはますことなき疵とおぼゆるわざなる。なほなほしきただ人の仲らひにてだに、あはつけく心づきなきことなり。みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを、思ふ心より外に人にも見え、宿世のほど定められんなむ、いと軽々しく、身のもてなし・ありさま推しはからるることなるを。あやしくものはかなき心ざまにやと見ゆめる御さまなるを、これかれの心にまかせてもてなしきこゆる、さやうなることの世に漏り出でんこと、いとうきことなり」（二六～二八頁）

従来もしばしば分析の対象とされてきた、朱雀院のこの長いことばは、女三の宮の将来について、かれなりのぎりぎりの選択を、明瞭に語っている。一般には、院は「拱手嘆息しているという体」で、「何の結論も最後に割り出すことができないでいる」（前掲秋山論文一六九頁）とするような見かたが大勢であるようだが、そうではあるまい。

まず、「皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり」と、そもそも皇女は独身でいることがベターとした上で、一般論としても、女は男と関係することが苦しみの種となることが確認される。そのいっぽ

う、親・兄弟に先立たれた女は、「すき者ども」の恰好の餌食となりやすいこともあり、独身を通そうとしても、心配であることに変わりはない、という。そして、女の人生の運・不運は予見しがたいことではあるが、女自身の失点とならないためには、親・兄弟の決めた結婚をするのがよい。つまり、女の責任能力が問われないかたちにすべきだ、とする。

要するに、朱雀院としては、自身の手で女三の宮の結婚を取り決めてやるほかない、との結論なのである。「片生ひ」の娘を無理に「世づきたるありさま」にするのは、もちろん本意でない。だが、かの女の皇女としてのプライドを保ち、上皇たる自分の面目をも潰させないためには、娘の「片生ひ」加減の尋常でないことが分かっているだけに、「今の世」に独身でいさせるなど、無謀というほかないのだ。皇女の尊貴さに、結果よければすべてよし、という楽観は許されない。

石田穣二氏に、次のような発言がある。

女三の宮のやうなぼんやりした人に、自ら危険を避けるやうな才覚は求め得べくもないのであるが、それ以前の問題として、どんなにしっかりしてゐても遁れがたい場合がある。そして事の起つた時、真相はどうであつたにせよ、女は弁明の余地もなく世間の評価、判断に身をゆだねるよりほかない。女の立場といふものは、さういふものであるよりほかない。まさにこの点に、この婿選びのくだりを通じて見られる朱雀院の思惟の、もつとも深い発想の根があると、私は見る。「（「若菜の発端における朱雀院について」〔同氏著『源氏物語論集』〈一九七一年、桜楓社〉所収〕一九〇頁）

朱雀院に確かな判断力があると見ること、まったく同感である。

それにしても、朱雀院が、女三の宮に「みづからの過ちにはなら」ぬかたちの人生行路を定めてやりたいと考えるのは、裏を返せば、結婚後、女三の宮には「過ち」があるだろうと、今から見透かしているからにほかならない。こ

れも、子を知る親ならではの心づかいと、言えば言えるのだろうが、愚直にわが子の幸福を願う親心とは、なんとかけ離れていることか。

朱雀院のことばが継がれる。

「いますこしものを思ひ知りたまふほどまで見過ぐさんとこそは、年ごろ念じつるを、深き本意も遂げずなりぬべき心地のするに思ひもよほされてなん。……」（二八頁）

院の、出家を目前に、なんとか女三の宮の処遇について、自身の方策が固まった安堵がにじむ。あとは人物選定のみ。右のような結論が出た以上、ただちに女三の宮の婿候補の比較がなされるのは、きわめて自然である。そして、じつのところ、最有力が誰かも、既定の事実なのである。

「……かの六条の大殿は、げに、さりとももの心えて、うしろやすき方はこよなかりなんを。方々にあまたものせらるべき人々を、知るべきにもあらずかし。とてもかくても人の心からなり。のどかに落ちゐて、おほかたの世の例とも、うしろやすき方は並びなくものせらるる人なり。さらで、よろしかるべき人、誰ばかりかはあらむ。……」（二八～二九頁）

「うしろやすき方はこよなかりなんを」「うしろやすき方は並びなくものせらるる人なり」と、「あやしくものはかなき心ざま」の女三の宮を託すに足る人物は、光源氏以外にないことが力説される。「方々にあまたものせらるべき人々を、知るべきにもあらずかし」というのは、一見乱暴なようであるが、朱雀院にとって、男女の情愛の問題は、今は二の次なのである。「片生ひ」の娘が、浮名を立て、親の顔に泥を塗ることを防ぐための結婚なのだから。「とてもかくても人の心からなり」も、「「何れにせよ当人（女三宮）の心掛次第だ」と無責任なことをいってのけ」（前掲今井論文一四二頁）たわけではあるまい。幸不幸は本人の気持のもちようひとつだから、源氏ならば、女三の宮に、安定した幸福を感じられるだけの配慮をしてくれるだろう、というのである。

「この世に恨みのころこともはべらず」

以上、朱雀院の思考の経緯については、すでに今井久代氏に簡にして要を得たまとめがあるので、次に引いておく。

鍾愛の娘であるだけに真剣な熟慮だ。院は彼女のその高貴な身が辱められぬよう、独身が最上、しかし乱倫の横行する昨今ではかえって汚される恐れがあり、たとえ幸せでも正式な結婚でないと大変な不名誉、よって父院裁可の正式な結婚、それならば光源氏にと考えた。つまり女三宮の結婚とは、あくまでも皇室が愛娘のために裁可する正式な結婚なのである。（「皇女の結婚――女三宮降嫁の呼びさますもの――」〔「むらさき」26輯、一九八九年七月〕四二頁）

「さらで、よろしかるべき人、誰ばかりかはあらむ」と、光源氏の絶対的優位が確認されている以上、以下の候補者たちの評定は、源氏選択の妥当性を確認する手続きにほかならない。

螢兵部卿宮は、異母弟とはいえ、性格が軽薄に過ぎる。家臣の大納言では、婿として物足りないし、そんな男に大切にされたところで、なんの喜びもない。柏木は、将来性はともかく、現時点では官位が低い。

語り終わって、「よろづにおぼしわづらひたり」（三〇頁）と地の文にはあるものの、朱雀院が選択に迷っていると思う必要はない。むしろ、女三の宮を結婚させる環境を整えるためのパフォーマンスの気配さえある。はたして、

かうやうにもおぼし寄らぬ姉宮たちをば、かけても聞こえ悩ましたまふ人もなし。あやしく、内々にのたまはする御ささめき言どもの、おのづから広ごりて、心を尽くす人々多かりけり。（三〇頁）

と、女三の宮は一躍、時の人となるのだ。

六　「げにさることなり。いとよくおぼしのたまはせたり」

朱雀院の真意を知らない人々は、それぞれに求婚運動を展開する。物語をふり返ると、玉鬘をめぐって男たちが競いあったとき以来の活気というべきか。ただし、目当ての男が決まっているか否かで、大違いなのだが。

こうした状況を気づかった春宮から、朱雀院に手紙が届けられる。

「さし当たりたるただ今のことよりも、後の世の例ともなるべき事なるを、よくおぼしめしめぐらすべきことなり。人柄よろしとても、ただ人は限りあるを、なほ、しかおぼし立つことならば、かの六条院にこそ、親ざまに譲りきこえさせたまはめ」（三二～三三頁）

朱雀院は、当初から、「あまたの中にかかづらひて、めざましかるべき思ひはありとも、なほ、やがて親ざまに定めたるにて、さもや譲りおききこえまし」（二二頁）との思いがあった。加えて、「片生ひ」の女三の宮を独身で放置する危険を思うと、自分の指示で結婚させることが必要だと考えている。そして、相手には、光源氏しかいない、とも判断していた。したがって、手紙を受け取った院の反応は、

……待ち聞かせたまひても、「げにさることなり。いとよくおぼしのたまはせたり」と、いよいよ御心だたせたまひて、まづかの弁してぞ、かつがつ案内伝へきこえさせたまひける。（三三頁）

と、ここぞとばかりに、結婚の実現に向けて動きはじめるのである。

春宮には、以前に対面した折、「即位した暁には、姉妹たちに目をかけてほしい。とりわけ母のない女三の宮には」と要請していたように、女三の宮の処遇をめぐって、朱雀院は、できるかぎりのサポートを期待している。そこで、この結婚についても、自分から相談することはせず、ほかならぬ春宮の慫慂によって決意した、という体裁を整えたのである。「この、若い世間知らず東宮の、分別ありげな、しかし形式的に割り切った言葉も、院にとっては、強力な支えとなった」（前掲秋山論文一七一頁）との見かたもあるが、玉上琢彌氏の言うとおり、院は、「東宮がこう言うのを待っていたのだ」（前掲玉上著書六五頁）。

否応なしに、女三の宮の結婚は、いよいよ重々しいものに仕立てられてゆく。

七　「いづ方につけても、この姫宮、おしなべての際には、よもおはせじを」

ここまで来れば、残された懸案は、光源氏が女三の宮との結婚を承知するか、否か、だけである。

光源氏自身、女三の宮の婿選びに朱雀院が苦慮していることは、先刻承知している。しかし、自分こそが白羽の矢を立てられるにふさわしい、とは思っていない。左中弁の申し入れに、兄より三歳年下であるにすぎない自分が、どれほどのお世話ができるか、保証の限りではない、として、乗り気でないのも、まんざら嘘ではあるまい。そこで、いったんは、息子の夕霧を婿候補に推薦するのだが、同時に自らその可能性を否定してしまう。このあたり、玉上氏が、「玉鬘の並びの巻巻での源氏なら、ここでも兵部卿の宮を推薦しそうなものである。下心があってのことであろう」（前掲玉上著書六七頁）と読み解くのは、まことに鋭い。脈はあるのだ。

弁は、必死の説得にかかる。それを受けての源氏の反応が、じつに興味深い。

「（a）いとかなしくしたてまつりたまふ皇女なめれば、あながちにかく来し方・行く先のたどりも深きなめりかしな。（b）ただ内裏にこそ奉りたまはめ。やむごとなきまづの人々おはすといふことは、よしなきことなり。それにはさはるべき事にもあらず。（c）必ず、さりとて、末の人おろかなるやうもなし。故院の御時に、大后の、坊のはじめの女御にていきまきたまひしかど、むげの末に参りたまへりし入道の宮に、しばしは圧されたまひにきかし。（d）この皇女の御母女御こそは、かの宮の御はらからにものしたまひけめ。容貌も、さしつぎには、いとよしと言はれたまひし人なりしかば、いづ方につけても、この姫宮、おしなべての際には、よもおはせじを」（三四～三五頁）

春宮の、「後の世の例ともなるべき事」との認識を受けるならば、源氏としても、bのように、「ただ内裏にこそ奉りたまはめ」と応ずるほかない。朱雀院自身は、この可能性について、「内裏には、中宮さぶらひたまふ、次々の女

御たちとても、いとやんごとなきかぎりものせらるるに、はかばかしき後見なくて、さやうのまじらひ、いとなかなかならむ」（二一頁）と、選択肢から外していた。それを承知しつつ、「やむごとなきまづの人々おはすといふことは、よしなきことなり。それにはさはるべき事にもあらず」と強く言い添える以上は、朱雀院が、源氏に白羽の矢を立てて、「方々にあまたものせらるべき人々を、知るべきにもあらずかし」（二九頁）と言っていた理屈をも、拒否するわけにゆかないだろう。加えて、cで「末の人」の先例として藤壺中宮のことを話題にし、独り言のように、その妹の女御、さらにその腹の女三の宮へと言及する（d）とき、〈紫のゆかり〉を求める源氏の情念に、ひさびさの火がともったに違いない。これでは、源氏が女三の宮の婿となることを断る理由など、どこにもないではないか。源氏の態度についての「いぶかしくは思ひきこえたまふべし」（三五頁）との語り手の推測は、決しかけていることがらを、さも未決状態であるかのように装う、ポーズにすぎまい。

八　「ただこの幼き宮にひかされて」

年末、女三の宮の裳着が、盛大に挙行され、三日後には、朱雀院が出家を果たす。ここに、二人の女性のことが触れられる。

裳着の折には、秋好中宮から、「かの昔の御髪上げの具、ゆゑあるさまに改め加へて」（三六頁）、女三の宮あてに贈られてくる。中に添えられた歌を見て、朱雀院は、「あはれにおぼし出でらるることもあ」ったが、「昔のあはれをばさしおきて」（三七頁）、あなたの幸運に女三の宮もあやかりますようにと、返事をする。

出家の折には、朧月夜尚侍との別れが、

尚侍の君は、つとさぶらひたまひて、いみじくおぼし入りたるを、こしらへかねたまひて、「子を思ふ道は限りありけり。かく思ひしみたまへる別れの、たへがたくもあるかな」とて、御心乱れぬべけれど、……（三八頁）

「この世に恨みのこることもはべらず」

と点描される。

二人は、今まさに出家しようとする朱雀院にとって、いかなる俗世の思い出につながる人であったか、おのずと反芻が要請されるところであろう。そして、二人への思い出の交差するところにたち現れてくるのは、ほかならぬ光源氏と院との関係である。院は、源氏へのいかなる思いをもって、あるいは捨てて、出家に臨んだのか。

念願の出家を果たしたはずの朱雀院であったが、

今日は、世を思ひ澄ましたる僧たちなどだに、涙もえとどめねば、まして女宮たち、女御、更衣、ここらの男女、上下ゆすり満ちて泣きとよむに、いと心あわたたしう、かからで静やかなる所にやがて籠るべくおぼしまうけける本意違ひておぼしめさるるも、ただこの幼き宮にひかされて、とおぼしのたまはす。（三八頁）

というありさまになった。前に、「御位を去らせたまひつれど、なほ、その世に頼みそめたてまつりたまへる人々は、今も、なつかしくめでたき御ありさまを、心やり所に参り仕うまつりたまふ限りは、心を尽くして惜しみきこえたまふ」（一五頁）とあったのを承けつつ、ここに一時代の幕が、確実に引かれたわけである。「ゆすり満ちて泣きとよむ」人々は、朱雀院の出家に、わが命運の尽きたことを、実感したであろう。

ところが、当の朱雀院は、ただちに「西山なる御寺」に籠居したわけではなかった。院との訣別を惜しみ悲しむ人々にひき止められる恰好で、なおも院の御所にいる。それを、院自身は、「ただこの幼き宮にひかされて、とおぼしのたまはす」のだが、この理由づけには、いかにも、本心の露顕が憚られたので、といわんばかりの、とってつけたようなところがある。となれば、女三の宮の処遇が決するまで……、と口にしながら、朱雀院がこのような中途半端な状態に続けるのは、別の目的のため、すなわち、自らに殉じた人々の思いを背に、最後の力を行使するため以外のなにものでもなかろう。

そして、いよいよ、光源氏の朱雀院訪問が語られる。

九　「おほいまうちぎみに先ぜられて、ねたくおぼえはべる」

出家をめぐる挨拶から始まった朱雀院と光源氏との対話は、「おぼしおきてたるさまなど、くはしくのたまはするついでに」（四一頁）という、物語の常套的な語り口に導かれて、本題へと入る。

「女御子たちを、あまたうち棄てはべるなん、心苦しき。中にも、また思ひ譲る人なきをば、とり分きてうしろめたく見わづらひはべる」とて、まほにはあらぬ御気色を、心苦しく見たてまつりたまふ。（四一頁）

朱雀院の気弱な切りだしかたに、源氏は同情を禁じえず、「御心のうちにも、さすがにゆかしき御ありさまなれば、おぼし過ぐしがたくて」（四一頁）、おのずと話題に乗ってゆくこととなる。

「げに、ただ人よりも、かかる筋は、私ざまの御後見なきは、くちをしげなるわざになんはべりける。……」（四一頁）

源氏も、皇女には後見人が必要である、とする。きょうだいに立派な春宮がいる以上、なんの心配もいらないはずだが、春宮が即位した暁には、かえって、「女の御ために、何ばかりのけざやかなる御心寄せあるべきにもはべらざりけり」（四一頁）と予想されるため、やはり、

「……すべて、女の御ためには、さまざままことの御後見とすべきものは、なほ、さるべき筋に契りをかはし、え避らぬことにはぐくみきこゆる御まもりめはべるなん、うしろやすかるべきことにはべるを、……」（四二頁）

と、結婚させることが安心だ、という。そして、

「……なほ、強ひて後の世の御疑ひ残るべくは、よろしきにおぼし選びて、忍びてさるべき御預かりを定めおかせたまふべきになむはべる」（四二頁）

と進言する。朱雀院において、女三の宮にふさわしい婿を、お決めになればよろしい。

朱雀院は、そうしたいのはやまやまだが、自分ではなかなか決しがたい、と応じる。さらに、思いあぐねたように

「この世に恨みのこることもはべらず」

して、

「……かたはらいたき譲りなれど、このいはけなき内親王ひとり、とり分きてはぐくみおぼして、さるべきよすがをも、御心におぼし定めて、預けたまへ、と聞こえまほしきを。権中納言などのひとりものしつるほどに、進み寄るべくこそありけれ。おほいまうちぎみに先ぜられて、ねたくおぼえはべる」（四二～四三頁）

と言う。院は、源氏にこそ女三の宮の「御預かり」になってほしい、とは言わない。目をかけてくれて、しかるべき人と結婚させてやってほしい、とだけ言う。そして、あなたのご子息が独身のときに、こちらから持ちかけていればよかった、と悔やむ。

これに対する源氏の反応が、珍妙を極める。

「中納言の朝臣、まめやかなる方は、いとよく仕うまつりぬべくはべるを、何ごともまだ浅くて、たどり少なくこそはべらめ。かたじけなくとも、深き心にて後見きこえさせはべらむに、おはします御蔭にかはりてはおぼされじを、ただ、行く先短くて、仕うまつりさすことやはべらむと、疑はしき方のみなん、心苦しくはべるべき」（四三頁）

という次第で、あっさり「うけひき申したまひつ」となるのだから。

源氏は、女三の宮の婿として、夕霧が不適格でないことは、以前にも、

「……中納言などは、年若く軽々しきやうなれど、行く先遠くて、人柄も、つひにおほやけの御後見ともなりぬべき生ひ先なんめれば、さもおぼし寄らむに、などかこよなからむ。……」（三四頁）

と語っていた。同時に、

「……されど、いといたくまめだちて、思ふ人定まりにてぞあめれば、それに憚らせたまふにやあらむ」（三四頁）

と、朱雀院が夕霧に白羽の矢を立てない理由を忖度してもいた。源氏は、余裕たっぷりに、自身の第一人者たること

を確認しつつ、左中弁の説得にも、「さすがにうち笑みつつ」（三四頁）、まんざらでもない様子だったのである。

ところが、いま、朱雀院は、ことさらに、源氏を女三の宮の婿に、とは考えていないかのような口ぶりをするのだ。あまつさえ、夕霧を太政大臣に取られて悔しい、とまで言う。これが、ナルシストでプライドの高い源氏の神経を刺激したであろうことは、想像にかたくない。ほとんど挑発するかのような朱雀院のことばに敏感に反応して、源氏は、夕霧では役不足であること、行く先は短くとも、自分こそが院鍾愛の内親王を後見する婿たるにふさわしいことを、言明するのである。

こうして見ると、朱雀院の態度は、あくまで優柔不断、愚痴っぽくさえあるのだが、そのじつ、腹を割って懇望することなどいっさいなしに、源氏の結婚承諾を巧みに引き出してしまったことになる。これを意図的に行ったのなら、まさに、老獪というほかない。源氏は、朱雀院の思う壺に、まんまとはまったのである。

もちろん、源氏は、朱雀院にうまく誘導された、などとは思わない。自邸に帰って、紫の上に、「女三の宮の御ことを、いと棄てがたげにおぼして、しかしかなむのたまはせつけしかば、心苦しくて、え聞こえいなびずなりにしを」（四五頁）と語っているとおり、断りきれない要請であったと信じている。しかし、源氏が朱雀院に言質を握られてしまったことは明白であり、結婚に至るプロセスとしては、うまくしてやられたといわざるをえないのだ。こうした二人の関係性が、以下の物語の展開に、大きく影を落とさないはずがない。

光源氏が、女三の宮との結婚を承引したことをうけて、

主の院は、今日の雪にいとど御風邪加はりて、かき乱り悩ましくおぼさるれど、この宮の御こと聞こえ定めつるを、心やすくおぼしけり。六条院は、なま心苦しう、さまざまおぼし乱る。（四四頁）

と、両者の心境が、さっそく対比的に示される。

一〇　「かの紫のゆかり尋ねとりたまへりしをりおぼし出づるに」

その後、年があらたまり、「朱雀院には、姫宮、六条院に移ろひたまはん御いそぎをしたまふ」（四八頁）。さらに、光源氏の四十の賀を経て、「二月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ」（五五頁）段取りとなる。

この間、光源氏と紫の上とは、苦渋に満ちた日々を余儀なくされているのだが、すべては、源氏の責任においてなされたことであり、誰を恨むわけにもゆかぬ。朱雀院の、「このいはけなき内親王」とのことばに違わぬ女三の宮の未成熟ぶりに、「かの紫のゆかり尋ねとりたまへりしをりおぼし出づるに、かれはされて言ふかひありしを」（五六頁）と、ついひき比べてみたくなるのも人情だが、この女三の宮もまた「紫のゆかり」であることを、そして、そのことゆえに結婚を承知する羽目にもなった動機を、源氏は忘れてしまったのだろうか。源氏の心のなかで、女三の宮は、「紫のゆかり」としての属性を失い、朱雀院の皇女としてのみ遇されるようになる。新婚三日目の夜にして、紫の上に夜離れのことわりを言う源氏が、「かの院に聞こしめさんことよ」（五七頁）と、朱雀院の思惑ばかりを気にしているのが、かれの置かれた状況の激変ぶりを象徴している。

その翌日の昼間、光源氏は、はじめて女三の宮を直視した。

女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのことことしく、よだけく、うるはしきに、みづからは、何心もなく、ものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ、児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくうつくしきさましたまへり。（六六頁）

そして、源氏は思う。

院の帝は、男々しくすくよかなる方の御才などこそ、心もとなくおはしますと、世人思ひためれ、をかしき筋に、なまめき、ゆゑゆゑしき方は、人にまさりたまへるを、などてかくおいらかに生ほしたてたまひけん。さるは、

いと御心とどめたまへる皇女と聞きしを。（六六～六七頁）

源氏の思いは、女三の宮を透かして、父院へと向けられる。今や、女三の宮は、亡き藤壺中宮の姪である事実も忘れられ、朱雀院の、育てそこないの娘にすぎない。院の子育ての不手際に比べ、わが女子教育のみごとなこと――「さし並び目離れず見たてまつりたまへる年ごろよりも、対の上の御ありさまぞ、なほありがたく、我ながらも、生ほしたてけり、とおぼす」（六七頁）。だが、このような呑気な感慨に浸っている場合だろうか。源氏は、自らの置かれた立場、引き受けた責任を、忘却してしまったかのごとくである。

一一　「尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ」

女三の宮が六条院入りを果たした同じ月のうちに、朱雀院は、かねて用意していた「御寺に移ろひたまひぬ」（六八頁）。「この幼き宮にひかされて」との口実で院の御所にいたのだから、そうするのが当然である。ところが、ようやく、「静やかなる所に……籠るべくおぼしまうけける本意」がかなうはずであるのに、なぜか院は、「この（六条）院に、あはれなる御消息ども聞こえたまふ」（六八頁）。

姫宮の御ことはさらなり、わづらはしく、いかにと聞くところや、など、憚りたまふことなくて、ともかくも、ただ御心にかけてもてなしたまふべくぞ、たびたび聞こえたまひける。（六八頁）

ほとんど過干渉ともいうべき朱雀院の態度は、ひとまず、わが子を気づかうゆえの親心だと理解しておこう。ただ、このような院の姿勢が、光源氏に大きなプレッシャーを与えていることは、見過ごさないでおきたい。さきにも、「かの院に聞こしめさんことよ」と、女三の宮への愛情うんぬんの前に、朱雀院の思惑を気にする源氏の姿が見られたが、女三の宮の背後に控える朱雀院の存在が、女三の宮に対する責任を負ったことで、源氏が意識する以上に大きくなってきているようである。そして、朱雀院は朱雀院で、「ともかくも、ただ御心にかけてもてなしたまふべく」

と、女三の宮のことはすべて源氏に任せた、と言いながら、「されど、あはれにうしろめたく、幼くおはするを、思ひきこえたまひけり」（六八頁）と、とても源氏に託したことで安心していられそうにもない様子なのである。

女三の宮を妻として迎えたことは、光源氏にとって、朱雀院とのあらたな関係性を生じさせることになった。源氏のなかで、朱雀院は、今さら特別視すべき存在でもなかったであろうが、朱雀院の側からは、違った。そして、朱雀院の源氏への異様な対抗意識が明らかになるとともに、その意向が源氏を左右するという、かつてない状況が、たち現れてきたのである。よって、「凡庸で底抜けに善良な朱雀院はその生母弘徽殿大后などと違って決して源氏の敵役などではない。どのような状況のもとでも院は一貫して、源氏の心優しい兄であり、（中略）君臣の立場に分かれても、政治の実権を競いあうべき微妙な関係に立たされた二人の、このようにうるわしい兄弟愛が描かれたことは注目に値する」（深沢三千男「朱雀院」〔「源氏物語必携Ⅱ（別冊国文学13号）」一九八二年二月〕八一頁）などと評しうるようなめでたい人間関係がここにあるとは、とうてい思えないのである。

この折、朱雀院からは、「紫の上にも、御消息、ことにあ」（六八頁）る。

「幼き人の、心地なきさまにて移ろひものすらむを、罪なくおぼしゆるして、後見たまへ。尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ。

そむきにしこの世にのこる心こそ入る山道のほだしなりけれ

闇をはるけで聞こゆるも、をこがましくや」（六八頁）

朱雀院は、さきに、女三の宮を源氏に託したい、と語ったとき、「方々にあまたものせらるべき人々を、知るべきにもあらずかし」（二九頁）と言っていた。それを思えば、これが紫の上に対する「破格の待遇」（前掲玉上著書一三〇頁）であることは、間違いない。だが、ここで注意したいのは、「尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ」とわざわざ持ち出した、女三の宮と紫の上との血縁の強調である。

すでに見たように、源氏は、女三の宮が「紫のゆかり」であることを、忘れさったかのようである。が、朱雀院は、紫の上に二人の縁の深さを訴えることで、女三の宮の六条院に占める位置を、確かなものにしようと図る。むろん、朱雀院が、源氏の藤壺思慕と、そこから発する「紫のゆかり」への執着とを、承知していたとは思えない。にもかかわらず、こうして、紫の上に、女三の宮とは「尋ねたまふべきゆゑ」があるとすることで、深く関係づけてしまったということは、源氏が意識するしないにかかわらず、女三の宮は、「紫のゆかり」以外のなにものでもなくなった、ということである。源氏にそれと認められない「紫のゆかり」の存在が、以下の物語を大きく動かすことになるとすれば、物語の基調の変容には、恐るべきものがある。そして、そのような皮肉な関係性をみごとにお膳立てして見せた張本人である朱雀院とは、じつは、途方もない怪物だったことになるのではあるまいか。つとに伊藤博氏が、「院も含めて宮乳母・左中弁・春宮等々その決定に六条院外の〈他者〉たちの思惑と対話が主導権を握り、光源氏はここで全く受身の立場に立たされ、しかもその結果が爾後の六条院物語の展開の死命を制するというありようが、これまでの光源氏物語のそれとおよそ異質なものである点に注目しなければならないだろう」（前掲伊藤論文八九頁）と示唆していた視点は、一歩すすめて、朱雀院の奸計という面から見直すことができそうである。

ところが、そのような朱雀院という人物の危険性に、源氏は、まったくもって無頓着なのだ。「あはれなる御消息を」（六八頁）と感動して、紫の上に、承知の旨返事するよう促すしまつ。さすがに、紫の上の返事には、

「そむく世のうしろめたくはさりがたきほだしをしひてかけな離れそ」（六九頁）

と、急変した現状への危機感がにじむ。だが、事態はすでに、「しひてかけ離れ」た後なのである。後戻りはきかない。

あらたに登場した「紫のゆかり」は、当の光源氏にこそその資格を否定されてしまったものの、物語世界では、たしかに「紫のゆかり」としての位置を与えられ、父院の抱く鬱屈した源氏への思いを、何も知らず背負いながら、

「みづからの過ち」（二七頁）とはならぬ「過ち」を犯すこともいたしかたなしとして、六条院に送りこまれたのであった。

物語を圧倒的な存在感で領導してきたはずの光源氏に、昔日の面影は、ない。

おわりに

以上、「若菜上」巻の、女三の宮の六条院入りまでの経過を確認してきた。ここから明らかになるのは、それ以前の巻々とは比較にならぬ重さで、朱雀院／光源氏という人間関係が俎上にのぼせられているという事実である。とくに、朱雀院の側からの源氏に対する対抗意識には、尋常ならざるものがあった。

この後、出家を果たした朱雀院は、物語の表舞台からはひとまず退いてしまうことになるわけだが、やがて、院の蒔いた種がある重大な結果を生じたとき、僧形のかれが再び登場するクライマックスが訪れる。そのときかれがしたこととは？　また、そのことのもたらす意味とは？

玉上氏は、「朱雀院は、（光源氏ニ）負けて、そして勝ったのである」（「帝王」〔「国文学」16巻7号、一九七一年六月〕四四頁）と評する。いわゆる『源氏物語』第二部の世界において、裏で糸を引き、操る、朱雀院なる人間像の提起する問題性については、続稿によって、さらなる解明を果たしたいと思う。

（一九九五年一〇月稿）